

2 発達の段階に応じた言語能力の到達度目標

平成7～23年度にかけて「学び」に着目した研究を発信してきた。ここでの「学び」の定義は、「児童自らの問いをもち、他者と関わりながら価値あることを求めて追究し、自己を高める新たな認識を自ら獲得する営み」であった。その後、平成24年～令和2年度にかけて、義務教育9か年の発達の段階に沿って「学び」を再定義してきた。この9か年を貫く「学び」の姿として、「他者と共同・協働し、能動的・自発的に学習に取り組む姿」を定義している。

また、言語能力を「読解力」「創造的思考」「他者とのコミュニケーション」の3つ側面から整理することで、先の学びの発達の段階に応じた到達度目標を設定している。

学年	読解力の側面	創造的思考の側面	他者とのコミュニケーションの側面
1	身の回りの具体的な事物を理解し、その体験の中で抱いた思いや考えを言葉にしたり、何らかの形で表現したりすることができる。	情報を記憶することができ、教えられた通りに言うことができる。	意図が支援者（聞き手）によって解釈されることができる。
2	身の回りにある事物を理解し、自分事として事物を捉え、正確に把握し、自分なりの方法で表現することができる。	アイデアや概念を説明することができる。	意図を何らかの手段で伝達しようとすることができる（非言語手段）。
3	身の回りの自然界の法則的なつながりやきまり、人の言動の心理的な背景をひも解くことができる。	情報・概念を新たな方法で使ってみる。	伝達手段の中に言葉が加わり、意図を明確に伝えようとすることができる（言葉＋非言語手段）。
4	人やもの、事柄の対象に自ら働きかけて理解し、ものごとの筋道やつながりを明らかにすることができる。	相違点が分別することができる。	会話でのコミュニケーションを中心に、他者に思いや考えを伝えることができる。
5	共に活動を行う他者から評価されたり、自己をふり返って自己評価をしたりすることができる。	立場・物事を正当化することができる。	聞き手の状況を捉えながら、他者に思いや考えを論理的に伝えることができる。
6	多面的な思考の広がりや、全体を把握した上で注目すべき要素を重点的に抜き出し、批判的に考察することができる。	新たな視点をつくり上げるることができる。	一般的な状況（社会的な状況も含む）に応じて、他者に思いや考えを論理的に伝えることができる。